

「2024年度天理大学アメリカス学会夏期定例研究会」で発表
中西 光一

7月27日(土)、2024年度天理大学アメリカス学会夏期定例研究会が開催された。報告者の1人として、中西は「ブラジルにおける米国系プロテスタント教会の歴史的展開—南部メソジスト教会を中心として—」というタイトルで発表した。

本発表では、19世紀のブラジルにおける米国系プロテスタント教会の歴史研究の動向を整理し、南部メソジスト教会の宣教師マーサ・ワッツ (Martha Watts) の書簡に焦点を当てて彼女の宗教観と世界観の特性を論じた。まず、プレスビテリアン教会、バプテスト教会、メソジスト教会に関する先行研究を概観し、教会設立の目的を明らかにした。具体的には、次の3つの目的が挙げられる。1) 米国の南北戦争後にブラジルへ移住した南部人移民の支援・保護、2) 移民子弟に米国式の学校教育の提供、3) 米国の覇権主義と反カトリック主義に基づいたブラジル社会の文明化、民主化の推進と共和主義政体の樹立である。

次に、ワッツによるフローラ・ブルーメル (Flora Blumer) という女性奴隷の解放の事例を検証した。その結果、彼女の解放には米国の女性解放思想 (フェミニズム) が関係していた点を明らかにした。ワッツの書簡には「母性本能」、「自由」、「女性の解放」といった言葉と黒人奴隷制を批判する記述が確認されており、当時のフェミニズム運動も性差別の反対と奴隷制の廃止を要求していたからである。したがって、ワッツの宗教観と世界観の特性とは、宣教師でありながらフェミニストとして、女性の解放と奴隷制の廃止を視野に入れた伝道活動に従事していた点であった。

最後に、本発表で明らかになった点をまとめたのち、参加者から米国系プロテスタント教会によるブラジルの文明化や女性解放思想、人種主義の問題点などについて建設的な質問が寄せられた。

第369回研究報告会 (2024年7月29日)

「揺れ動く聖地像—複数の視線が絡むおぢば一枚刷り—」

井上 国太郎 (東京大学大学院)

聖地としての輪郭が定まりきっていなかった戦前のおぢばにおいて、複数のアクターがそれぞれの立場でおぢばという空間イメージを形成していたことを主張した。論証にあたって活用したのは、明治20年代から昭和20年代 (19世紀末から戦前) にかけて、異なる立場からおぢばに関わっていた複数のアクターが発行していた一枚刷り (ビラ) である。五十嵐太郎『新宗教と巨大建築』に代表される先行研究では、教団指導部による聖地整備の経緯に関心が集中しており、教団以外にもおぢば

に関わっていたアクターが複数存在していたこと、そしてそれぞれのアクターが独自のおぢば像を形成していたことが見落とされている。それに対し、本発表では一枚刷りを社会構築主義的に分析することで、世界軸=ぢばを中心に断続的に拡大していくという一元的なおぢば像が初めから確立していたわけではなく、むしろ戦前の揺籃期には複数のおぢば像が共存していたことを明示した。

2024年度公開教学講座のご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (10) —

2024年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

第1回 6月 井上昭洋所長

172話「前生のさんげ」

第2回 7月 澤井真研究員

114話「よう苦労して来た」

第3回 9月 岡田正彦研究員

135話「皆丸い心で」

第4回 10月 八木三郎研究員

36話「定めた心」

第5回 11月 森洋明研究員

85話「子供には重荷」

第6回 1月 中西光一研究員

144話「天に届く理」

グローバル天理

第25巻 第9号 (通巻297号)

2024年(令和6年)9月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社

Printed in Japan